

研究 成 果 報 告 書

(ふりがな) まつした きょうへい

氏 名 松下 恭平

現 職 (所属名、職名等) 愛知県 名古屋市立二城小学校 教諭

修了又は卒業年月、専攻又は専修コース名

学校教育研究科 学校教育専攻 道徳・生徒指導コース 平成30年3月終了

1. 研究題目

異学年集団における道徳的判断力の高まりに関する一考察
～ P 4 C を取り入れた授業の有効性の検討～

2. はじめに

本研究は、道徳の授業において P 4 C の手法を導入し、異学年で学習を進めることで道徳的判断力が高まるかどうかを検討することを目的としている。

2. 1. 道徳的判断力とは

「道徳的判断力とは、それぞれの場面において善悪を判断する能力である。つまり、人間として生きるために道徳的価値が大切なことを理解し、様々な状況下において人間としてどのように対処することが望まれるかを判断する力である。」これは、文科省(2017a)の『小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編』における道徳的判断力の定義である。

柳沼(2018)は、この文科省の定義に加え、「自己を見つめ、自分自身の過去の思考や行動を振り返ると共に、将来のよりよい生き方を構想する能力でもある」としている。

改訂された小学校学習指導要領道徳の目標において、「よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる」(文科省、2017b)とされた。従来目標「学校の教育活動全体を通じて、道徳的な心情、判断力、実践意欲と態度などの道徳性を養うこととする。」(文科省、2008)と比較し、道徳的な心情と道徳的な判断力が入れ替わっている。また、「道徳的諸価値についての理解を基に」(文科省、2017b)と道徳的諸価値に対する知的理解にも重点が置かれることになった。これらも道徳的心情ではなく、道徳的判断力を高めることがねらわれていると考えてよいだろう。これらを踏まえ、本研究における道徳的判断力とは「それぞれの場面において、よりよい生き方を判断する力」と定義したい。

2. 2. P 4 C とは

道徳的判断力を高めるための手法として本研究においては P 4 C を活用したい。P 4 C とは Philosophy for Children の略であり、子どものための哲学とも呼ばれる。問いづくりと対話を重視しており、他者との対話の中で自分自身の考えを再構築していくという点で、多面的・多角的な視点から道徳的判断力を高めることに寄与するのではないかと考える。そこで、本研究においては、P 4 C の要素を取り入れ、子どもたちが問いをつくり、その後、その問いについての対話をするという実践の流れで行う。

3. 実践について

3. 1. 対象学年

今回は、3年生33人（筆者の担任学年）と6年生32人での合同授業とした。3年生という発達段階を考慮した際に、最も学年差が出るのが6年生であると考えたからである。筆者がオーストラリアにてP4Cの視察を行った際、話を伺った先生から「近接学年の合同授業では出てくる意見の質に違いがほとんど見られない」という意見を受けてのことである。

3. 2. 教材について

使用した教材は「たっ球は四人まで」（教育出版「小学 どうとく はばたこう明日へ3」より）、主題等は以下の通りである。

【主 題】 友達と助け合って（B 友情、信頼）

【ね ら い】 卓球をめぐるしゅんたちのやり取りを通して、友達とよりよい関係を築くためにはどのようなことが大切なのかについて考えさせることで、友達と互いに理解し合い、信頼し合っ

て生活しようとする心情を育てる。
【教材の概要】 しゅんがひろし、さとし、あきらを誘い、スポーツセンターで卓球をしようとする。そこへ、とおるがやってきて仲間に入れてもらおうとするが、しゅんが断る。とおるが給食当番の仕事を手伝ってくれたことを思い出したしゅんが、仲間に入れてようと声をかける。しかし、とおるは断る。結局、しゅんは4人で卓球をするが、とおるのことが気になって仕方ない…。

3. 3. 問いづくりについて

これは3年生が行った。結果、「なぜしゅんは、4人で卓球を行っていても、とおるのことが気になったのか」という問いが学級全体で決定された。

3. 4. 実際の授業について

実際の授業では、先の問いについて、3年生と6年生の学級を同程度の人数に分け、混成することで多面的・多角的に考えさせることができるよう授業を進めた。もう一人の教員には、ねらいを達成できるように、話合いの進行役をお願いした。なお、会場は体育館とし、後ろ半分を6年担任のグループが、前半分を筆者のグループが使用した。立てた問いを基に、子どもたちの話し合いの流れに任せることとし、教員はファシリテーターの役を担った。

4. 結果

学習における道徳的判断力の高まりの見取りについては、小木曾(2016)の「事前（道徳の時間の前）の書いた価値に対するとらえ方と本時の終末で記述した内容との比較」をもって検討したい。また、事前と事後の友達観に対する意識調査からの言語データに対し、樋口(2014)の「KH Corder」を用いたテキストマイニング分析を行い、定量的に検討する。ここで、扱った内容項目「友情・信頼」について学習指導要領解説編に書かれている概要、学年段階ごとの指導の要点を以下にまとめておく。（文科省、2017）

<小学校3年生>

友達と互いに理解し、信頼し、助け合うこと

この段階においては、活動範囲が広がることで、集団とのかかわりも増え、友達関係も広がってくる。また、気の合う友達同士で仲間をつくって自分たちの世界を確保し、楽しもうとする傾向があり、集団での活動などがこれまでになく盛んになる。しかし、自分の利害にこだわることで、友達とトラブルを引き起こすことも少なくない。

<小学校6年生>

友達と互いに信頼し、学び合って友情を深め、異性についても理解しながら、人間関係を築いていくこと

この段階においては、これまで以上に友達を意識し、仲のよい友達との信頼関係を深めていこうとする。(中略)このことから、友達同士の相互の信頼の下に、協力して学び合う活動を通して互いに磨き合い、高め合うような、真の友情を育てるとともに、互いの人格を尊重し合う人間関係を築いていくようにすることが求められている。

いずれの学年においても、友達に対し、理解したり信頼したりすることが求められている。つまり、学習の前段階における価値への捉え方に対し、学習後にそういった視点での深まり(よりよい生き方につながる判断)が見られれば、道徳的判断力が高まったと考えてよいだろう。

これを基に、児童の記述を比較すると、3年生では以下のような友達観の変化が見られた。

表1 児童から抽出した記述(3年生)

	事前意識調査	事後意識調査
A児	友達と一緒にいると、遊びがもっと楽しくなる。	大切な存在だし、助け合えたり信じ合えたりする。
B児	一緒に遊んだり話したりして、楽しい人。	友達にはいろんな種類があつて、理解をし合って親友や友達につながる。

表2 頻出語句の比較(3年)

事前意識調査 (KH Corderによる分析結果) ()内の数字は出現回数	事後意識調査 (KH Corderによる分析結果) ()内の数字は出現回数
遊ぶ(25)、一緒に(17)、楽しい(16)、けんか(14)、話す(11)、仲直り(8)、助け合う(5)、信頼(5)	大切(15)、親友(14)、助け合う(8)、信じ合う(8)、理解(5)

中学年のねらいである「友達と互いに理解し、信頼し、助け合うこと」に対し、事前の意識と事後の意識で、ねらいに近付いていることが分かる。事前の意識調査では「遊ぶ」ことでの関係性に重点を置いている記述が、事後では「助け合う」や「信じ合う」、「理解」という言葉が増えている。このことから、3年生においては、道徳的判断力を高めることができたと思えてよいと考える。

一方、6年生は以下のようなようになった。

表3 児童から抽出した記述(6年生)

	事前意識調査	事後意識調査
C児	「友達」とは協力したり、一緒に遊んだり、時にはけんかをすることもある。	「友達」とは、一方的な関係ではなれない。信頼関係を築くことが「友達」への近道。
D児	友達は、自分にとって遊んでくれたり、協力してくれたりして、どんなことでも自分の相手になってくれる人。	友達は相手になってくれるだけではなく、自分の気持ちを理解してくれる。自分のことを完璧までいかに分かってくれる人だと思った。

表4 頻出語句の比較（6年）

事前意識調査 (KH Corder による分析結果) () 内の数字は出現回数	事後意識調査 (KH Corder による分析結果) () 内の数字は出現回数
楽しい (17)、信用 (16)、助け合う (13)、 理解 (12)、信じ合う (10)、一緒 (10)、 けんか (7)	信頼 (18)、理解 (14)、一緒 (13)、親友 (13)、絆 (9)、クラス (5)、けんか (5)

こちらは、高学年のねらい「友達と互いに信頼し、学び合って友情を深め、異性についても理解しながら、人間関係を築いていくこと」と照らし合わせると、異性への理解という部分への意識が希薄に感じられる一方で、事後のクラスという言葉からは異性も含めた集団としての人間関係を意識していることもうかがえる。事前の段階からねらいに近付いている言葉が見られるが、事後ではそれがかなり集約されていることもうかがえる。友情・信頼という価値についてよりよい考え方を選択した、つまり道徳的判断力が高まったと捉えてよいだろう。

5. 研究のまとめ

道徳の授業においてP4Cの手法を導入し、異学年で学習を進めることは道徳的判断力の高まりに一定の効果があることが明らかとなった。3年生の立場から考えれば、高次の考えに触れることができるので、一定の高まりが予想されたが、6年生にとっても、異学年と学習をすることで、道徳的判断力を高めることができたのではないかと考える。(表3、4)これは、異学年で学習を行うことで、自分たちの学年だけでは考えつかない新たな視点に気付くことができるという効果の影響と推察できる。6年生のE児は「話し合いの時は、違う考えの人がたくさんいて、自分が考えられなかった考え方もあって、学習することができました」と学習後の感想を書いていた。この記述からは、高次の考えに触れることができる3年生に利点があるだけでなくことも示唆された。

一方で、今回の研究においては、分析対象とした合同授業が1回に留まったこと、対象学級が各学年1クラスだけになってしまったことなど、成果の一般化という点で課題が残る。今後は、対象学年や対象クラス数を増やし、今回と同様の結果になるのかどうかを検討していく必要がある。

主な参考文献

- 樋口耕一(2014)『社会調査のための計量テキスト分析 内容分析の継承と発展を目指して』ナカニシヤ出版
- 河野哲也(2018)『じぶんで考え 自分で話せる こどもを育てる哲学レッスン』河出書房新社
- 教育出版(2018)「たっ球は四人まで」『小学 どうとく はばたこう明日へ 3』
- 文部科学省(2017a)『小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編』, pp. 20, 46-47
- 文部科学省(2017b)『小学校学習指導要領』p. 165
- 文部科学省(2008)『小学校学習指導要領』p. 90
- 小木曾陽子(2016)「ビギナー必見! 道徳的判断力Q&A」『道徳教育 2016年1月号』No. 691、明治図書、p 11
- フィリップ・キャム著、榊形公也監訳(2017)『子どもと倫理学 考え、議論する道徳のために』萌書房
- 柳沼良太(2018)「学習指導要領解説(目標等)に関わる重要用語 道徳的判断力」『道徳教育 2018年12月号』No. 726、明治図書、p 11